

令和5年度三重大学国際交流事業実施報告書（学内版）

1. 申請部局

学部・研究科名等：教育学部

事業担当者の職・氏名：准教授・服部明子

内線電話番号：9360

電子メール：hattori@edu.mie-u.ac.jp

2. 事業の名称（20字以内、別に副題を付けても良い）

言語と文化への理解を深める海外研修「海外教育実地研究B」の実施

3. 事業内容の別（該当するところにチェックを入れてください。）

教職員，学生の海外派遣（学会やシンポジウム等の出席は除く）

海外交流機関等からの教職員，学生の受け入れ

国際教育プログラムの開発や推進

その他

4. 事業の取組結果

(1) 事業概要

本事業は、外国人児童生徒等への日本語指導が行える教員養成の一端を担うため、「海外教育実地研究 B」における海外研修を行う。

第1回【講義】国内外における言語政策、年少者日本語教育の現状

第2回【講義】日本の近代史および台湾における日本語教育史

第3回【講義】異文化理解とコミュニケーション①会話、②文字

第4回【講義】台湾における日本語教育の現状

第5回【講義】アジアにおける伝統文化

第6回【講義】研修前指導

第7回～第15回【海外研修】2024年2月14日～2024年2月19日

内容および日程は、以下(3)を参照

(2) 事業の背景・これまでの実績

三重県教育委員会が文部科学省の調査(令和2年)に基づき算出した値では、公立小中学校において日本語指導が必要な外国人児童生徒等の在籍率は三重県が全国2位であった。教育現場で急増する外国人児童生徒への日本語指導が行える教員養成の一端を担うとともに、海外体験を通じて国際化への取組に寄与するため、日本語教育、母語・継承語教育、多文化共生が主テーマである。

2017年度に「多文化・異文化コミュニケーション」をテーマにした海外短期プログラムの整備に向け、海外協定校であるドイツ・ハイデルベルク大学に教育学部学生を引率し、プログラム案の一部を予備的に実施した。実施後、研修内容および研修地域を見直し、2020年度より「海外教育実地研究 B」(教育学部・学部共通開講科目)を新設した。当初は同年度2月に台湾研修を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響で中止となり、海外の日本語教育に関するオンラインによる講演会とワークショップ、学生交流を代替的に実施したが、今回が初の現地研修となった。

(3) 事業実施結果

参加学生は7名(学部6名、教職大学院1名)であった。所属コースは以下の通りである。

- ・家政教育初等コース3年2名
- ・国語教育中等コース1年2名
- ・国語教育初等コース1年1名
- ・学校教育コース教育心理学専攻1年1名
- ・教育学研究科教職実践高度化教育実践1年1名

学生は、事前に現地で自ら学びを深めたいテーマを設定し、「個人課題の実施」として、自由行動の時間を活用して各自フィールド調査を行い、帰国後、レポートを提出した。

なお、現地研修実施に際し、高雄日本人学校、文藻外国語大学、公益社団法人日本台湾交流協会高雄事務所、台湾文化部、高雄市政府文化局(高雄市立歴史博物館、高雄市皮影戲館)から多大な協力を得た。特に博物館関連における文化体験は、三重大学人文社会学研究科修了生である国立高雄餐旅大學旅館管理系・蘇紋謹氏と共同で実施した。

	2/14(水)	2/15(木)	2/16(金)	2/17(土)	2/18(日)	2/19(月)
午前	移動 中部－台北	移動 台北－高雄	高雄日本人 学校見学	博物館見学 台湾文化部、高雄市政府文化局(高雄市立歴史博物館、高雄市皮影戲館) 國立高雄餐旅大學 旅館管理系・蘇紋謹	自由行動 (個人課題の実施)	移動 高雄－桃園
午後	自由行動	高雄交流協会 訪問		文藻外語大學との 学生交流 (個人課題の実施)		移動 桃園－中部



高雄日本人学校での授業参加



高雄市皮影戲館における文化体験



文藻外語大との学生交流

(4) 事業の意義

本事業では、教育学部すべてのコースの学生を対象とし、教員養成課程において、多角的に異なる言語・文化に触れ、実地で学ぶ機会を提供し、日本とアジアを相対的に捉え、異なる文化や言語への理解を促すことができた。また、学生からは以下の声が聞かれた。

<学生の感想 この研修で「できるようになったこと」>

- ・中国語で商品名を言って注文したり、英語で質問する勇気を出すことができた
- ・人に話しかけられるようになりました。元々、調べて計画して旅行をすることは得意でしたがこちらでは言葉が伝わらないので、聞くしか方法がなく、最初は勇気がいりましたが、最終的には気軽に人に英語で話せるようになりました。
- ・自分はなにをしたらいいかを細かく確認することができるようになりました。積極的に行動して、自分でなんとかしようとして、行動していました。行動に責任を持てるようにもなった気がします。
- ・スムーズに行動できるようにするために、事前にあらゆることを予測すること。頭の中で動きをシミュレーションし、分からないことをネットや動画で調べる。それでも分からないことは、人に聞く。
- ・とりあえず話してみよう、行動してみようという思い切った動きができるようになりました。
- ・言葉が伝わらない不安が楽しさになりました。動かないともったいない気持ちになりました。できるようになるために、1人だと心細いときは他の受講生にも頼るようにしました。一緒に動いてもらいました。
- ・計画する力、行動力が高まった。人に聞いたりしっかり計画をたてたりしないと迷ってしまうので自然と高まった。

・道に迷ったり困ったときは勇気を持って人に聞くことができるようになりました。表情やジェスチャー、翻訳を活用しました。

(5) 事業の発展性

本事業では外国語能力を参加要件にせず、興味のある学生であれば誰でも参加可能とした。初めての海外渡航となった学生は7名のうち5名、また、1年生が4名であった。このことから、また、本事業は、(4)に挙げた学生の声などから、海外に興味はあるが言語面また安全面への不安から、単身で学生海外チャレンジ応援事業(2024)や協定校への長期交換留学などへの心理的障壁が高い学生にとって、最初の海外体験を行うゲートウェイの段階として有効的なプログラムであることが示された。来年度以降は内容をさらに精査した上で継続実施予定である。また、本事業を足がかりとして他プログラムへ連結する可能性が見られたことから、今後、本事業に参加した学生が短期もしくは長期留学の学生派遣数増加につながることを期待される。

(6) 中期目標・中期計画における位置づけ

該当の中期目標：「2 教育 (8)」

該当の中期計画：「2 教育に関する目標を達成するための措置 (9) - 1」

(7) その他

なし

令和5年度三重大学国際交流事業実施報告書（一般公開：日本語版）

一般公開しない

令和5年度三重大学国際交流事業実施報告書（一般公開：英語版）

一般公開しない